新春投稿

俳句一年

久松　聰（高槻市）

目の落ちてふくら雀の家族かな
遠山のくっきり見ゆる余寒かな
平安の春の光に召さるかな

百代の薄墨桜さくら守
花びらの一つひとつが美しく
はらはらと桜散るなり母逝きぬ
亡き父よ新緑の候迎へけり

青空や翁の庭のさくらんぼ
初夏の神輿をかつぐ百人衆
純白のウェディングドレス梅雨晴間
近江富士よし蓮の花さらによし

かなかなに明日の希望の声を聞く
墓参りして京都西山入日かな
十字架をめぐる旅なり秋の空
紅葉や仏の下の阿修羅像

老いてこそ体は元気紅葉して
森繁久弥おしむかに紅葉濃し
秋深き猫の眼光絵画展

臨床40年にして思う

杉本　叡（柏原市）

1970年に大学を卒業し、4月から臨床を始めて3年間の勤務医を終え、開業。あれから40年、歯科医人生様々なことがあった。その中で私が一番大切にしていることがある。「患者にとって何が一番良い治療なのか？」、このことを大事にして現在も治療を行っている。

時代的な変化について一言。1970年代においては補綴、歯内治療、インプラントなどが外国から日本に入ってきた。そして、それを紹介する先生方が多くおられた（メーカーの説明屋さん）。1980年代に入り、その説明屋さんの中より実際に治療を行って、それを説明する先生に変化する（ただこの中で不必要な物まで説明なさる先生もいた）。

1990年代に入り、多くの先生方が海外との交流へと展開していく中少しずつ良い物使用への傾向が見え始め、2000年代に入ると、より良い物をといった傾向が強くなってきているように思う。

このように昔は、メーカーの説明屋の先生がたくさんおられて、またかと言われたようだが、今我われ歯科医療は、機械、器具、材料、薬品では治癒しないケースが多く出現している。これは、歯科医療だけでなく医療全体を考えていないからであると感じる。

では現在患者が求めている医療（歯科医療もふくむ）とは、一言でいえば治癒である。この、治癒するためのEBMおよび薬品、材料を我われ歯科医師が作るしかないのである。そのために、医科の先生方との科学的な交流を深めることが必要となる。この方法論においては、協会において何か具体的な活動をお願いする。

いくさと不戦

門奈　丈石（平野区）

政治家には好戦派が多いようだ。それは、自分が戦場へ行く可能性が無いからだ。なぜ戦争をやるのかといえば、今も昔も物盗りが動機で、領土を広げ、資源を奪うのが目的だ。

戦をおっぱじめ国を破壊し、利権を確保し傀儡政権をつくり、自国の企業を送って復興事業で金儲けと支配を狙う。これが侵略のマニュアルであり、イラク・アフガンでも同じパターンが展開している。しかし、資源や権益を奪われた国や住民は、貧困に落ちるのみならず、長い歴史に培われた伝統や価値観まで変えることが強要され、人間としての尊厳をも奪われると、当然、反撃に出て終わりの無い戦争が続くのである。

しかし、恐ろしいことに戦争は一時的に需要を喚起し、景気回復の効果があることには要注意である。

わが国を戦争のやれる国にするため「憲法改正」を主張するグループがいるが、一度暴力に訴えれば泥沼の悲劇は続き、終わるまで長い年月のかかることは、今アメリカが苦悩する中東を見れば明らかである。それを回避するには「確かな理性」と解決するまで「話し合う」忍耐が不可欠である。

強力な軍事力があれば、安全は保たれるだろうか。過去にもそのような時代はあったが、結果は逆で、軍事力が最も強かった時期は、暴力により殺された民衆が最も多かった時代である。各国が軍事力を競った20世紀は、地球上で2億を超す人々が国によって殺された。

軍拡による抑止力で戦争を防ぐという思考は、もう非現実的である。軍拡は限りなく戦争への危険度を増すだけであり、軍拡で解決できるのであれば、とっくの昔に戦争はなくなっていたはずである。

戦争をなくすには軍縮しかない。軍縮を主張するには、自ら範を垂れねば説得力がない。平和憲法のもと、核兵器を持たぬ我が国は、堂々と発言する資格がある。核廃絶の潮流が生まれつつある今、被爆の実態を知らせ、核廃絶とともに不戦のリーダーとして歩を進めたいものである。

山登り

鷲見　和恒（中央区）

医学部での研究生となったが、五里霧中、手探りで試行錯誤を繰り返すところへ突然、たくさんの文献を小脇に、助教授が現れ、中の一冊を開いてこれはどういうことだと質問された。何のことやらさっぱりで、脂汗かいて呆然と横文字を見つめていたが、いま思い出しても汗顔の至り。

歯科蔑視の風の中、母校の名誉にかけて、己の不勉強を悔やみながら、抄読会は針の筵。テーブルの片隅に身を縮め、息をひそめているばかり。母校の研究室と比べ、医歯格差を身をもって知った。無残であった。誘われるまま、母校に残っておればと無念であった。

途方にくれているとき、教室員のK氏が山登りに誘ってくれた。黒四ダム開発の頃である。砂埃の道を小型バスに揺られ、弥陀ヶ原からは「立山ボッカ」の一行とともに歩いた。彼らの歩調は決して早いとは思われないが、「一本入れよう」という先達の声で、手にした杖代わりの丸太を背負い子の下に立て、立ったまま休むのである。

足投げ出して水飲んで、小走りに駆け出す我らより、常に先へ行ってしまう。後年雪崩で全壊した雷鳥荘に泊まったが、風呂場で見た彼らの背中の背負い子の痕が「タコ」のようになっているのには感動的でもあった。

翌朝、天候あやしきなか、剱登頂を試みた。前剱にかかるところで雨。あっと思う間もなく、行く手は滝のよう。進むは冒険、退くは勇気。命からがら飛び込む剱山荘。小屋を揺るがす嵐の夜も、明ければ快晴。後立山連峯のうえ、空一面金色に輝いて、ご来迎とも、ご来光とも、天上の気分。人間万事根性努力。健康が第一。朝の来ない夜はない。明日に向かって、我慢、我慢。